

令和6・7年度

川口市教育委員会研究委嘱「学校間連携教育」に関する研究
研究紀要

研究主題

学びをつなげ 夢をはぐくみ 未来を拓く 連携教育の推進

～多様性を尊重した関わりの中で主体的に学び続ける子どもたちの育成を目指して～



舟戸学園

舟戸幼稚園

舟戸小学校

南中学校

あいさつ



川口市教育委員会教育長
井上 清之

舟戸学園（舟戸幼稚園、舟戸小学校、南中学校）におかれましては、令和 6・7年度川口市教育委員会「学校間連携教育」に関する研究委嘱を受け、研究主題に「学びをつなげ 夢をはぐくみ 未来を拓く 連携教育の推進～多様性を尊重した関わりの中で主体的に学び続ける子どもたちの育成を目指して～」を掲げ、1 園 2 校が連携を図りながら一丸となって研究を進めてこられました。ここに、その成果を研究紀要としてまとめられましたことに、心より敬意を表します。

本研究では、子どもたちの能力や可能性を引き出し、自信と意欲を育むために、幼小中のそれぞれにおいて発達段階を踏まえた目指す子どもの姿を設定し、実践を積み重ねてこられました。一例として、幼稚園では「元気でのびのびと遊び、何事も自分の力で意欲的にやろうとする園児」、小学校では「自ら課題を見つけ、見通しをもち、他者との違いを受け入れ、協働して生活できる児童」、中学校では「自ら問いを立て、見通しをもち、自分と相手の考えを大切にし、納得解を見いだせる生徒」等、子どもの姿を具体的に設定されました。研究を進める際には、常にそれらの姿を共有し合うことで、学習指導と生活指導・生徒指導を一貫とした教育と捉えて、取組を進めてこられました。

子どもの育ちに応じた、幼小中の 12 年間の学びと育ちの連続性を重視した、なめらかな接続の実現は、校種を超えた学校間連携の大切さを示唆する研究であると確信しております。

結びに、2 年間にわたり、本研究を意欲的に進めてこられました園長先生、校長先生方をはじめ、教職員の皆様のご努力に心より感謝の意を表すとともに、今後なお一層の研究の発展に向けてご尽力くださることをご期待申し上げ、挨拶といたします。

あいさつ



舟戸学園長 川口市立南中学校長
佐藤 朋子

平成 16 年度にスタートした「舟戸学園連携教育」は、今年度で 22 年目を迎えました。これまで、多くの方々のご指導を賜りながら、研究及び実践を積み重ねてまいりました。本学園の連携教育の研究は、舟戸幼稚園、舟戸小学校、南中学校が、荒川の堤防の上に並び立つ恵まれた立地条件、環境を生かしながら、幼小中の 12 年間の学びをつなげるものとなっています。令和 6・7 年度は、川口市教育委員会の研究委嘱を受け、研究主題『学びをつなげ 夢をはぐくみ 未来を拓く 連携教育の推進』のもと、「多様性を尊重した関わりの中で主体的に学び続ける子どもたちの育成を目指して」をサブテーマとし、研究に取り組んでまいりました。子どもたちの発達段階を踏まえ、目指す園児・児童・生徒像を具体的に設定し共有し合うとともに、子どもたちが互いに関わり合いながら主体的に学び続けるために、保育、教育活動等を工夫し実践したことで、学びの質が向上し、様々な場面で資質・能力の育成につながる子どもたちの変容が見られたことが研究成果として挙げられます。今後も、次代を切り拓く子どもたちの健やかな成長に向けて、舟戸学園として全教職員が一体となり、研究に邁進してまいります。

結びに、このような貴重な研究の機会を与えていただくとともに、研究の推進にあたりまして高所よりご指導賜りました浦和大学特任教授 安原輝彦様、川口市教育委員会教育長 井上清之様をはじめ学校教育指導課指導主事の皆様方に心より感謝申し上げます。



舟戸学園グランドデザイン

川口市立舟戸幼稚園 ・ 川口市立舟戸小学校 ・ 川口市立南中学校
～ 幼小中連携教育全体構想 ～

学びと育ちの連続性を重視したなめらかな接続をめざす教育の充実

学校教育目標

南中学校	「 優 し く 強 く 賢 く 」
舟戸小学校	「 すすんで学ぶ子 明るい元気な子 思いやりのある子 」
舟戸幼稚園	「 あかるく なかよく たくましく 」

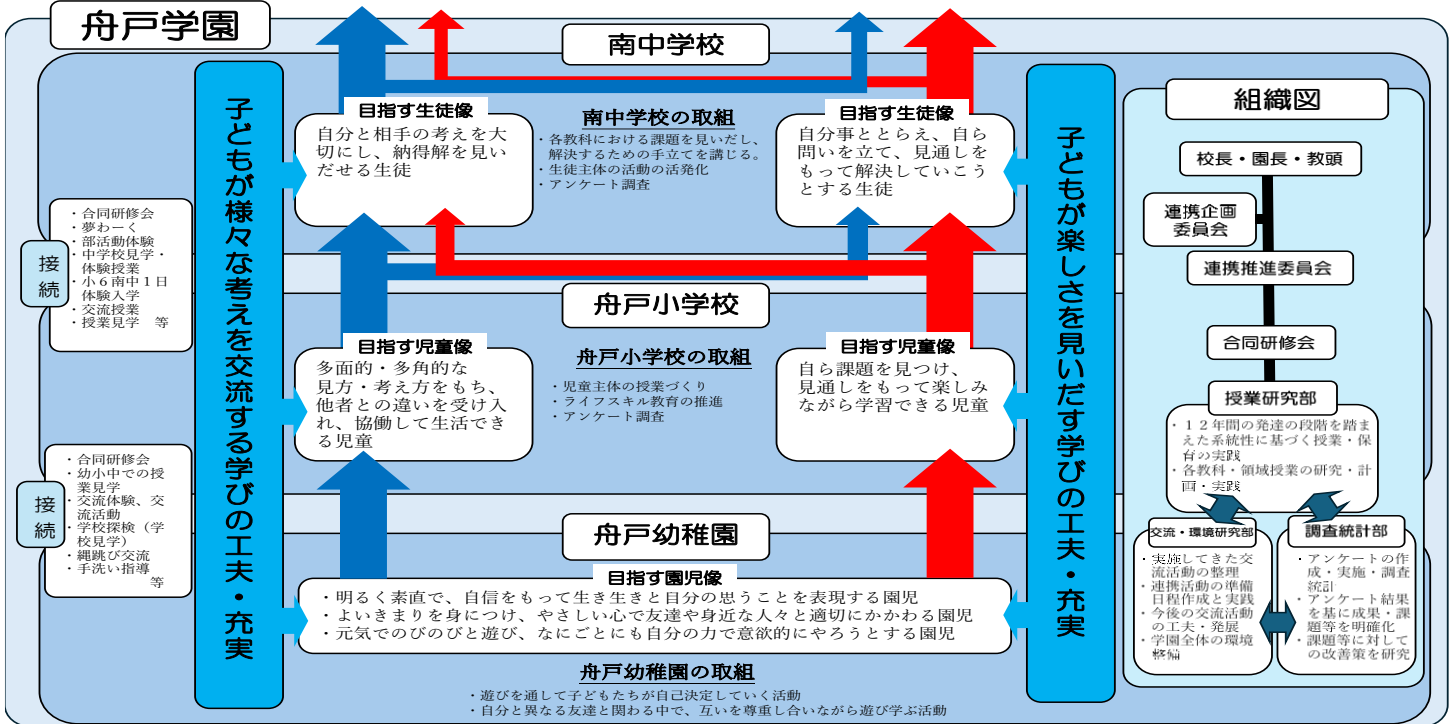
令和の日本型学校教育

急激に変化する時代の中で、我が国の学校教育には、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

研究主題

「学びをつなげ 夢をはぐくみ 未来を拓く 連携教育の推進」

～多様性を尊重した関わりの中で主体的に学び続ける子どもたちの育成を目指して～



主題設定の理由

現在、少子化、情報化、グローバル化の進展など、子どもたちを取り巻く社会環境が変化する中で、教育現場においては学習意欲の低下や小1プロブレム、中1ギャップと言われる状況がある。子どもが社会に出る頃には、今よりも変化の激しい、予測困難な時代が到来すると言われている。そのような未来に対応するためには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが重要である。そのためには、教育を通じて、解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解ける力を育むだけでは不十分である。これからの子どもたちには高い志と意欲をもち、自ら問いを立てて課題解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められる。舟戸学園の幼小中連携教育では、子どもたちに求められる資質・能力の育成に当たり、「多様性を尊重」「主体的に学び続ける」という視点を研究主題に挙げた。この視点に基づいた手立てのもと、子どもたちの育ちを中心に教育活動を工夫することが幼小中の接続における課題の解決につながると考え、「学びと育ちの連続性を重視したなめらかな接続をめざす教育の実現」をテーマに、研究主題のもと、本研究を行うこととした。

交流・環境研究部

【幼小中連携に向けての取り組み】

○連携カレンダーの活用

年度当初の舟戸学園合同研修会の際に連携カレンダーを共有して、継続的な幼小中の連携を目指した。連携カレンダーを参考にしながら、異校種交流を実施した。

令和7年度 舟戸学園連携カレンダー4/23

● 子どもの学び ● 教師の学び ● 共通の学び

行	事	学	小	中	幼
1	幼小中連携研修会	●	●	●	●
2	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●
3	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●
4	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●
5	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●
6	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●
7	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●
8	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●
9	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●
10	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●
11	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●
12	舟戸学園合同研修会	●	●	●	●

○異校種での授業見学

教員が異校種の授業を見学することで、互いの授業実践を参考にして研究に取り組んだ。目指す園児像・児童像・生徒像を達成するための手立てを互いに共有した。

○幼小中連携合同研修会の実施

舟戸学園の教員全体で研究主題実現に向けて研修を行った。令和6・7年度は、安原先生を招き講義を聞いたり、各研究部で活動したりした。

【交流活動の内容】一部抜粋

○中学生の学習補助

夏休みのサマースクール期間に、中学生が小学生の学習補助を行った。



○幼稚園での読み聞かせ

小学校図書委員会の児童が幼稚園で読み聞かせを行った。



○幼稚園の舟戸動物園

園児が小学生を招待し、自分たちで作った動物で遊んでもらう。



授業研究部

○舟戸幼稚園

- ・友達と一緒に遊びを進める姿や、友達との関わりの中でどのような援助や環境構成が必要かを教師間で学び合うことができた。
- ・異年齢児や、小学生、中学生との交流など、いろいろな人との関わりを意図的、計画的に展開することができた。

○舟戸小学校

- ・算数と国語では、授業の終末に振り返りシートへの記入を行い、本時の学びを書き記すことで、学習の理解度を把握したり、次の授業に生かしたりした。
- ・児童同士で活発な話し合いができるよう、話し合い時に意識したい言葉を子どもたちで考え短冊にまとめて貯めていく「ことば貯金」を行うなど、環境づくりをした。

○南中学校

- ・授業や活動ごとに「振り返り」を実施することにより、自らの学びの状況を把握し、主体的な学びにつなげることができた。
- ・授業の中でグループワークを効果的に取り入れた活動を多く行い、多様な意見が出やすい環境づくりをした。
- ・子どもから生まれた問いをもとに課題を設定し、子どもが見通しをもって学びに取り組めるよう単元(題材)計画を工夫した。

【まとめ】

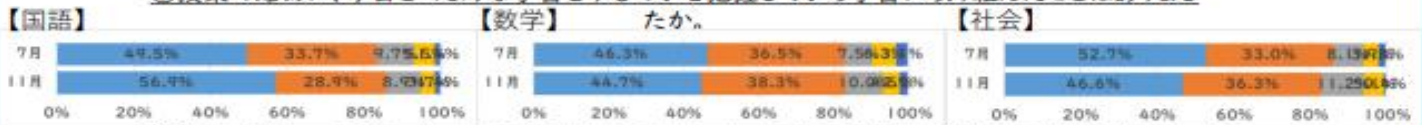
- ・子どもが試行錯誤しながら課題解決に向かう過程を授業づくりにおいて工夫した。
- ・幼小中で共通して「話し合い」を大切に授業づくりを行った。

調査統計部

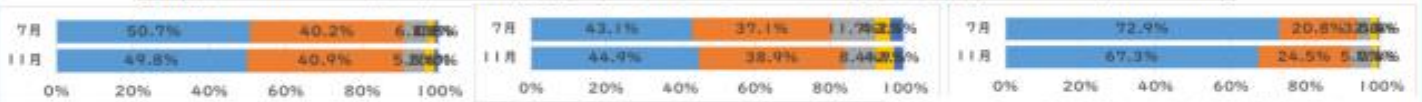
【中学校】

3教科に共通して、7月からの大きな変化が見られなかったものや、肯定的な数値が下がってしまうものもあり、否定的な意見の減少には至らなかった。しかし、各教科でねらいを明確にしたり、振り返りを行ったりすることで、生徒が見通しをもって学んだり、次の学びに生かしたりする姿が増えている。なお、以下の2つの項目で肯定的な回答が8割以上を占めているが、7月の時点で肯定的な回答の割合が高かったことが、大幅な増加に繋がらなかった要因ではないかと考える。 ■よくあった ■ときどきあった ■どちらともいえない ■あまりなかった ■ほとんどなかった

①授業の始めに、今日どのような学習をするのかを把握してから学習に取り組んだことはあります



②授業でグループで話し合ったり、意見や考えを出し合ったりして課題を解決したことはありましたか。



【小学校】

①②では、肯定的な回答の割合が増加した。
◎話合いの視点を明確にすることで、児童が目的意識をもって話合い活動に参加できた。その結果、児童が他者の話を最後まで聞き、話し手が受け入れられていた。

③の質問では、「よく当てはまる」、「当てはまる」の合計が60.5%から59.2%に下がった。

△課題を多面的・多角的に見たり考えたりする効果的な手立てを考へていく必要がある。

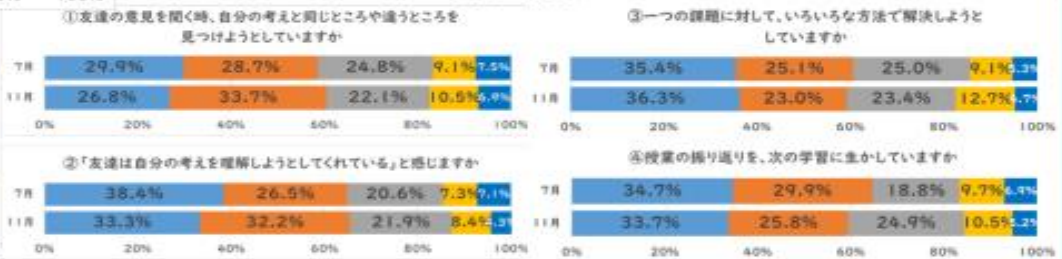
④の質問では、「よく当てはまる」、「当てはまる」の合計が64.5%から59.4%に下がった。

△授業の振り返りを行っているが、次の学習に生かすための振り返りの仕方を検討する必要がある。

【幼稚園】

幼稚園では園児の遊びや生活の様子を観察した上で、園児の友達との関わりや思いの伝え方に関するアンケートを行った。

アンケート結果や観察から、改めて発達の段階に合わせた援助を見極め、保育内容を考えることの大切さがわかった。教師の仲立ちのもと始まる園児同士の関わりは、共同体験が増えていくにつれ、主体的に遊びを展開していく姿が見られる。さらに教師の代弁や言葉掛けの中で、園児は相手の思いを聞くことの大切さにも気付いていく。幼児理解の重要性や援助の見極めが大切であり、それらを考慮した保育を今後も行っていきたい。



研究の成果と課題

本研究では、「学びをつなげ 夢をはぐくみ 未来を拓く 連携教育の推進」を研究主題に掲げ、幼稚園・小学校・中学校が連携し、多様性を尊重した関わりの中で主体的に学び続ける子どもたちの育成を目指して研究を進めてきた。

研究の成果として、幼小中の発達段階を踏まえた目指す子ども像を共有し、「話合い」や「振り返り」を重視した教育活動を各校種で実践できた点が挙げられる。幼稚園では、友達との関わりを通して遊びを広げる姿が見られ、教師の適切な援助や環境構成の重要性が再確認された。小学校では、振り返りシートや対話を促す環境づくりにより、児童が他者の考えを受け入れながら学ぶ姿が見られた。中学校では、生徒の問いを生かした課題設定や協働的な学習を通して、多様な意見を尊重し主体的に学ぶ姿が育まれた。

また、アンケート調査や観察を通して、子どもたちの主体性や多様性に関する実態を把握し、教育活動を見直す手がかりを得ることができた。さらに、連携カレンダーの活用や異校種交流、合同研修会の実施により、教職員間の相互理解が深まり、幼小中のなめらかな接続に向けた基盤づくりが進んだ。一方、振り返りを次の学習に十分に生かしきれていない場面や、多面的・多角的に考える力の育成が課題として挙げられる。また、交流活動の成果を学習や評価とどのように結びつけていくかについて、さらなる検討が必要である。今後は、実践と評価を往還させながら、子どもの変容を軸に連携教育の質的向上を図っていきたい。

あ と が き

川口市立舟戸小学校長 駒崎 弘匡



本学園では、令和6・7年度川口市教育委員会より「学校間連携教育」に関する研究委嘱をいただき、2年間にわたって研究に取り組んでまいりました。急激に変化する時代の中で、子どもたちが自分のよさや可能性を確認するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるような資質・能力を育成することが求められています。そこで、研究主題を「学びをつなげ 夢をはぐくみ 未来を拓く 連携教育の推進」～多様性を尊重した関わりの中で主体的に学び続ける子どもたちの育成を目指して～と設定し研究を進めてまいりました。研究は道半ばであり、更なる工夫と改善が必要です。今後も皆様からいただいたご指導をもとに研究を深めてまいります。

これまで懇切丁寧にご指導を賜りました浦和大学特任教授の安原輝彦様、川口市教育委員会の皆様にご心より「感謝とお礼を申し上げます。

川口市立舟戸幼稚園長 須山 恵美子



幼児期は主体的な遊びの中で、自分の思いや考えを伝え合い、互いに認め合います。時に折り合いをつけたり、一緒に工夫したりしながら次第にのめりこんでいくうちに、遊びを広げ、その経験を通してたくさんのお話を学んでいきます。一人一人の発達や生活体験は様々です。多くの体験を通して自分が生きるこの世界の不思議や感動などを味わうことが成長にもつながります。遊びを通して培われる力は生涯にわたって社会の中でよりよく生きる基盤となります。活動の中で園児が心動かされるものを教師が捉えてよりよい環境を整備することや一人一人に適切に関わることが個や集団を成長させることにもなります。

舟戸学園でこの2年間の研究に取り組む中で、中学校3年生を卒業する段階でどのような力を身につけてほしいかという願いをもち、幼小中の各々が担う役割を果たすことが大切であると感じています。舟戸学園という立地条件の中で充実した連携が互いの成長を促すことも大切にしながら今後も研究を深めてまいります。

結びに、本研究の推進に対してご指導賜りました浦和大学特任教授 安原輝彦様、川口市教育委員会の諸先生方にご心より感謝申し上げます。

ご指導いただいた先生方（敬称略）

浦和大学社会学部現代社会学科特任教授	安原 輝彦				
川口市教育局学校教育部次長兼指導課長	池田 光伸				
川口市教育局学校教育部指導課指導主幹兼指導係長	小川 敏明				
川口市教育局学校教育部指導課主幹兼教育研究所副所長	小堀 貴紀				
川口市教育局学校教育部指導課指導主事					
西牧 孝子	菅野 優太郎	横田 純一	宮本 麻紀子	佐藤 彰典	海老澤 成佳
平野 雅洋	櫻田 貴昭	佐々木 淳一	譜久村 航	磯 奈保子	笠原 たまき
三宅 穰世	高安 紀行	早水 久美子	後藤 光希		

研究に携わった教職員

令和7年度

(南中学校)	校長 佐藤朋子	教頭 坂本圭一郎	主幹教諭 若林拓海	研究主任 竹谷亮祐			
	板橋佳子	春山多紀理	二階堂龍誠	菅野航平	笠原豪資	高橋晴香	
	矢作雄大	東一雄	高橋菜那	川崎尚徳	國分智博	行村健	
	横田美羽	新垣樹	石田結衣	松崎拓真	鈴木伴美	笹木舜都	
	中川勇作	佐藤和芳	知念和恵	松山俊彦	五十嵐誉	大塚直美	
(舟戸小学校)	校長 駒崎弘匡	教頭 遠藤崇寛	主幹教諭 村上幸弘	研究主任 本間太陽			
	板橋萌絵	渡邊公恵	吉野優香	八巻裕子	北風美代子	佐久間裕寿	
	永田健太	山本悠史	塚本拓人	鈴木耀太	永井元樹	瀬山愛心	
	塚越颯	重泉勝治	梅木一弥	大武貴子	松村寛子	高橋莉菜	
	佐々木葉留花	小岩紗都	神野陽子	笹尾佐知子	小林光明	河根慎一	村上水絵
(舟戸幼稚園)	園長 須山恵美子	研究主任 オブライアン菜穂子					
	萩原綾	井澤瑞穂	雑賀直美	高岡宏文			

令和6年度

(南中学校)	長屋都子	勝田寛子	齊藤紗江	橋本健太郎	樋上建二	和田浩一	森美佐子	田島英恵	下島由佳
(舟戸小学校)	校長 加田明								
	細井智美	芝田貴大	春日希美	齋藤淳平	金子敏子	梶湯恵	関成美	馬場聡	稲田亮
(舟戸幼稚園)	池田宏美	瀨瀬佑美	高橋りな						